

帰るところ

アーチボルドの右のほっぺたは冒険好きで、右のほほからはなれて外に出て行ってしまいました。広い楽しい世界のことを見たくてたまらなかつたのです。アーチボルドは赤いほっぺたを追いかけましたが、見つかりません。翌朝になり空に浮かぶ風船にくっついているほっぺたを見つけたと思ったら、風船が割れて海におち、そのまま泳いで行ってしまいました。「もう二度とあいつには会えない」と、こんなに悲しかったのは初めてだと思うほど、悲しくなってきたアーチボルドです。

一方、小さな赤いほっぺたは、広い海の真ん中に一人ぼっちであることに気づいてビックリしました。陸に上がり、遠くにアーチボルドの姿を見つけてホッとしたのもつかの間、アーチボルドはふりむきもせず自転車にのって行ってしまいました。赤いほっぺたは急いであとを追いかけて、アーチボルドの右のほほにとびつきました。ほっぺたをなでたアーチボルドは声をあげて喜びました。『アーチボルドのほっぺた』（ピネッテ・シュレーダー作 矢川澄子訳 ほるぷ出版発行 1979）のお話です。

私たちは、「本当は～したい」を持っているのですが、その気持ちに蓋をしていることがあります。「いまは子育てに忙しいから無理」や「どうせ家族に反対される」と考え、相談することもなく、心のなかに思いを留めます。知らず知らずのうちに大きくなっていて、はちきれんばかりに動き出すことがあるかもしれません。

高校生のときのホームステイ先のホストマザーが作るケーキが美味しかったことをきっかけに、ケーキ職人になろうと決意し製菓学校に入学した女性です。学びを深めるためにフランスで修行したのち、飴細工を極めたいと日本にもどり、日本人の「自分にとっての師匠」を探し出し弟子入りしたいと門戸を叩きました。自分の決断と行動です。

「私もホストマザーみたいなケーキを作りたい」から始まった「～したい」は、外国人が多く住む街で、ケーキ職人であるご主人と製菓店の経営につながっています。今は二人の子どもを育てながら、店舗を増やしています。「～したい」は、「地域の外国人のサポートをしたい」に広がり、日本に移住したばかりで地域に疎いママさんたちの支援を行っています。

心の中にある「～したい」を大事に育てて行くことが大切です。「～したい」の熟成は、自分ひとりでできるものでもなく、家族や友人など身近な人が抑圧しないことが大きいでしょう。周囲の応援があれば、自信をもって努力を続けることができます。ひどく落ち込むことがあっても、「帰る場所がある、聴いてくれる人がいる」は、心の安定と成長のための栄養剤になります。

アーチボルドも冒険好きの赤いほっぺたも、どちらもアーチボルドです。ときどきは、「本当のところ、私は何をしたいの？何が好きなの？何をしていると、うれしかったり、楽しかったりするの？」と自分自身の赤いほっぺたに問いかけてみましょう。親だって「～したい」があります。自分を解放させてあげましょう。冒険も「帰るところ」があれば、思いっきり行動できます。仮に失敗しても、「よくやった、私」と自分を自分で受け止め、ねぎらいます。信頼できる誰かに話を聴いてもらいます。そうすれば、「どんな自分も、丸ごと全部自分」と思うことができ、自分がちゃんと自分のところに帰ってきます。

あなたの赤いほっぺたは、「何をしたい」と思っていますか。